

授業内でコンピュータを活かす方法

山川 清太郎
YAMAKAWA Seitaro
Université de Pharmacie de Kyoto
bpr5000?saturn.dti.ne.jp

小松 祐子
KOMATSU Sachiko
Université de Tsukuba
komatsu.sachiko.gt?u.tsukuba.ac.jp

ここ数年で大学の教室が大きく変わった。スライドやコンピュータ端末が設置されている教室の割合は増え、無線 LAN などのネット接続インフラも整ってきた。以前は LL 教室と呼ばれていた場所は CALL 教室と姿を変え、教育とコンピュータは切り離せない関係となった。今後も iPad などのタブレット端末の普及、電子黒板の設置、電子書籍・デジタル教科書の整備...と、この傾向は続いていくであろう。

しかしながら、我々外国語教育に関わる教員にとって、「コンピュータを用いた授業=CALL」という考えが強いためか、この有効な「教育ツール」を十分に活かしていない印象を受ける。そこで本稿では、教員が気軽にコンピュータを用いて授業を行う方法として、「授業内における PowerPoint の使用法」(山川)と「インターネットを使ったフランス語授業」(小松)の一例を提示したい。

1. 授業における PowerPoint の使用法

PowerPoint¹とは、マイクロソフトが開発している Microsoft Office に含まれるプレゼンテーションソフトウェアである。一般企業ではもちろんのこと、大学での研究・教育現場でも多用されているソフトであるが、ことさら外国語教育の現場ではあまり利用されていないように感じられる。そこで前半部分では、教員が気軽に PowerPoint を用いて授業運営ができるような例として、「フラッシュカード教材」と「講義教材」について述べていきたい。²

■ フラッシュカード教材

フラッシュカードとは、主に幼児教育で用いる教材であり、カード内容(絵や写

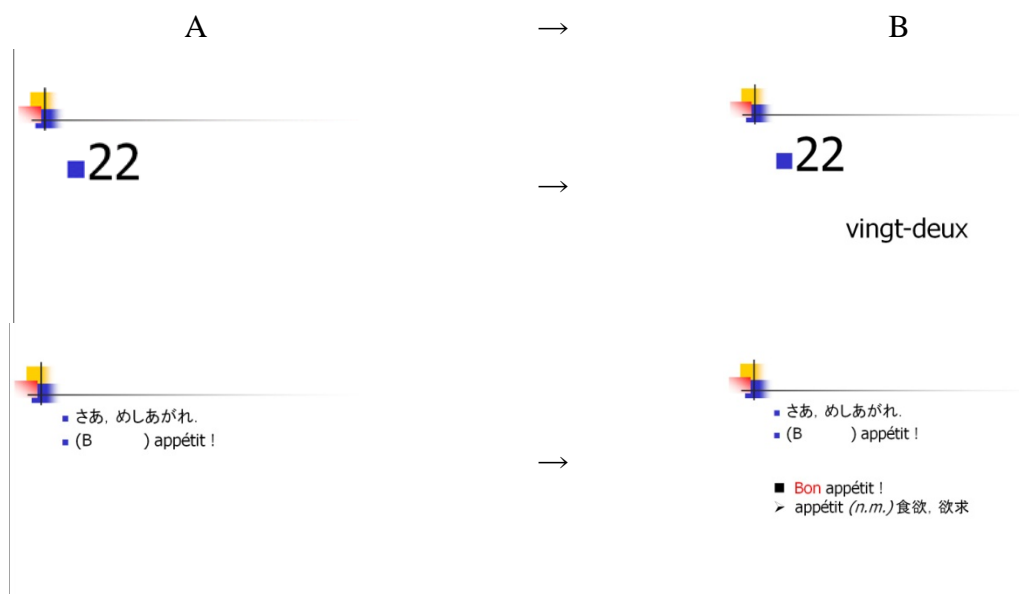
¹ 2012年5月現在、最新版は PowerPoint 2010 である。

² 文法の授業における PowerPoint を用いた授業運営に関しては、YAMAKAWA Seitaro (2007), « L'efficacité de PowerPoint dans les cours de grammaire », RENCONTRES 21, pp.55-59 を参照。

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2012

真) を即座に答えさせることを目的とした教材である。PowerPoint を用いたフラッシュカード教材でも、本来の目的で学習者に用いる。

ここでは、具体例として「数字」学習と「仏検対策問題」のカード教材を取り上げる。



授業の流れは、「学習者に出題 (A) →学習者が回答→教員が正答を提示、解説を加える (B)」という一連の行為を繰り返し行う。フラッシュカード教材を作成する際に重要なのは、正答を提示する際に PowerPoint の「アニメーション」を用いることである。アニメーションとは、スライド内の指定した写真や文字に動作を加える機能である。アニメーションには「開始・強調・終了」の3種類があるが、今回の場合、マウスクリック時に文字がスライドに現れる「開始：スライドイン」を用いて作成している。アニメーション機能は設定により方向や速さなどを変更することができる。スライド内に自由に文字を置くことを可能にするテキストボックスと組み合わせれば、穴埋め問題の「穴」に回答を表示することも可能になる。また事前にスライドの順序を変更することで、学習者の理解度を再確認したり、小テストなどの試験に利用したりすることが可能であろう。

■ 講義教材

ここでの講義教材とは、語学、文学、文化といった講義体系の授業で用いるスライドのことである。PowerPoint で作成したスライドを用いることによって、従来の授業形式で行ってきた色による文字の強調だけでなく、学習者に図や写真などを容易に提示することができ、また前出のアニメーション効果を用いることで学習者に視覚的インパクトを与えることができよう。

具体例として、教科書「ミッション・インターネット」を用いた授業³スライド

³ 山川清太郎 (2011) 『「コンピュータ・フランス語」授業報告』, 第24回獨協大学フランス語教授法研究会報告, pp.48-50

を取り上げる。



スライド作成のポイントとしては、1枚のスライドに多くの内容を記述しないことである。とりわけ、教員の口頭説明の分量とスライド内容のバランスに留意する必要があるだろう。また学習者が容易にスライド内容を理解できるよう、図や写真の選択、記述内容、スライドレイアウトに気を配ることも重要ではないか。

ある程度のコンピュータの知識があれば、「誰でも」「簡単に」PowerPoint を用いて授業を行うことができる。学生の理解度を向上させるために、教員は担当する授業の性質を考慮に入れながら、図、写真、配色、アニメーション効果を適材適所に用いたスライドを作成することが求められるであろう。

2. インターネットを使ったフランス語授業

インターネットについては、リソース活用から交流型にいたるまで外国語の授業へのさまざまな活用法がある。近年では教育機関の情報環境が整備され、学生の情報リテラシーも向上しており、フランス語授業での活用の可能性も増している。しかし、一方で授業時間やカリキュラム上の制約による困難があり、とりわけ初級段階の学習者の多いフランス語では、授業内でのインターネット利用には二の足を踏む教員は少なくないだろう。

しかし、たとえ授業のごく一部であっても使用してみる価値はある。日本のフランス語学習者の一番の問題は、フランス語を学習する動機があいまいであり、学習の有用性を実感しにくい（フランス語をかけ離れた世界のものと感じている）ことにあるように思われるためである。インターネットを使うことによって、フランス語を身近なもの、すぐにも使って何かができるものであるという実感を与えることができるのではないだろうか。また教室活動へオーセンティシティを与えるという効果も期待される。

また、近年欧州を中心に提唱されているいわゆる *approche actionnelle* または *communic' actionnelle*⁴ の外国語学習において、インターネットはタスクを中心とした学習活動と親和性の高いメディアとされている。タスク学習においては、細部からつめる文法中心学習と異なり、外国語を実際に使おうとすることから起こる気づ

⁴ Bourguignon, C. (2010) *Pour Enseigner les Langues avec le CECRL*, Paris, Delagrave.

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2012

きや、タスク遂行過程そのものに学習があり、学習者主体の学習が可能となるとされている。学習者に満足感、達成感をあたえる学習方法であると考えられる。

そこで以下では1年目クラスと2年目クラスという異なったレベルで、授業内でインターネットを活用するための例を紹介したい。

*初級（1年目）授業での使用例

学習すべき言語要素が多い初級段階では、インターネットに向かう時間的余裕がない場合が多い。教室環境の問題もある。しかし教師用インターネット接続とプロジェクターを備えた教室は今日少なくなっている。授業の区切りに5～10分を使って、教師側からインターネットコンテンツを提示することにより、学習者の文化的理解を深め、学習意欲を向上させることができるのではないだろうか。

たとえば、ごく初級段階でアルファベやつづりと発音の規則を学習する際にフランス人の名前を例に挙げることはしばしば行われているだろう。そこで即座にインターネットに接続し⁵、*prénoms français*を紹介するサイト⁶を見せることにより、最近の人気の名前ランキングを紹介し、その読みを練習することによって、授業にアクチュアリティをもたせることができる。また授業内に一度はパリの話をする機会があるのではないだろうか。その際、パリ観光局のサイト⁷とトップページに公開された2分ほどのプロモーションビデオを視聴する。実はパリ観光局のサイトには日本語版が存在するが、フランス語版と日本語版を比較するとその情報量の差は一目瞭然である。フランス語を学習することによって、得られる情報の魅力を伝えるよい機会となる。

*2年目授業での使用例

フランス語を第二外国語として学ぶ2年目のあるクラスで、学生に「インターネットでフランス語を使って何をやってみたいですか」という質問をしたところ、さまざまな回答が得られた。「ニュースを見てみたい」、「フランス人と交流してみたい」、「フランス人のツイートをフォローしたい」、「世界遺産めぐりをしてみたい」、「美術館のサイトを見てみたい」、「好きなミュージックアーティストのページを見てみたい」、「フランス語学習のサイトを使ってみたい」など。これらの希望の多くは授業内で以下のようにかなえることができる（以下は合計7回分の授業内容）。

1) メディア紹介（授業1回分）：

メディアリストのプリントを作成・配布し、フランスとケベックの主要メディア（テレビ、ラジオ、新聞）、およびTV5を紹介→メディアサイト(FR2)へアクセス→前日20時のニュースイントロを視聴し、わかったことを言う（グループ作業、その後発表）→教師による解説。

⁵ あらかじめページを保存しておくことももちろん可能である。またここで挙げるサイト紹介型の授業内利用の場合には不測の技術トラブルに備えて、サイトコンテンツのバックアップをとっておくことが望ましい。

⁶ たとえば <http://meilleursprenoms.com/> など。

⁷ <http://www.parisinfo.com/>

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2012

2) メール交流サイトの紹介（授業1回分）：

メール交流サイト「マルチリンガルネットワーク
<http://rose.ruru.ne.jp/multiplication/m-net.html>」の紹介→フランス人の自己紹介文を読み、気に入った人を選んで発表する（フランス語で名前、国籍、職業、居住地、趣味などを言う）→自分の自己紹介文を書いてみる。

3) 情報検索を中心としたタスク活動⁸（授業5回分）：

フランスの地理と世界遺産（Google mapでの検索）、SNCFサイトで列車検索、ホテル検索、観光地情報検索（以上各1回の授業）、その後、期末課題として、フランス国内旅行プランを立て（授業外に準備）、発表する（1回）。

このような授業を実施するにあたっては、さまざまな問題も生じうる。技術トラブルや、学生の意外な質問などには臨機応変に対応する必要がある。辞書に載っていない単語やスペルミスにも遭遇するだろう。それが生きたフランス語の体験であり、さまざまな発見をもたらす有意義な経験として前向きにとらえる態度が大切である。また、もっとも重要と思われるのは、学生にタスクの意義をしっかりと説明し理解を得ることであろう。学生が伝統的な学習観を持つ場合、これらの学習活動に拒否反応を示す場合もあるかもしれないからである。学生の学習観、言語観を変えるのも教師の役目ではないだろうか。学生がタスク活動を通じた学びにやりがいと達成感を見出し、フランス語を身近な使えるものであると実感できるよう、インターネットを活用できるとよいのではないだろうか。

⁸『ミッション・インターネット』（駿河台出版、2009年）はこの種の活動を授業内で効率よく実践するための教科書である。